

大学生の自尊感情におけるジェンダー・アイデンティティの影響

吉村 健

(京都教育大学大学院)

The influence of gender identity on university student's self-esteem

Takeru YOSHIMURA

2016年11月30日受理

抄録：近年、性を多様なものとして捉える考え方が広まっている。本研究では、セクシュアリティのうちジェンダー・アイデンティティを取り上げ、大学生の自尊感情への影響を検討した。ジェンダー・アイデンティティの因子（一致一貫的性同一性、現実展望的性同一性）の得点をもとに因子ごとに高群、中群、低群にわけ自尊感情の尺度得点の差を検討した結果、一致一貫的性同一性では高・中・低群の順で自尊感情が高く、現実展望的性同一性では高群が中・低群より自尊感情が高かった。自尊感情の性差を検討した結果、有意な差はみられなかった。自尊感情におけるジェンダー・アイデンティティの規定因を検討した結果、全体ではジェンダー・アイデンティティの2因子の尺度得点が正の方向に自尊感情の尺度得点を予測し、男女別では、男性において現実展望的性同一性、女性において一致一貫的性同一性の尺度得点が正の方向に自尊感情の尺度得点を予測することが示された。以上の結果から、大学生においてジェンダー・アイデンティティは自尊感情に影響を及ぼす要因であることと、その影響には男女差があることが明らかとなった。

キーワード：ジェンダー・アイデンティティ、自尊感情、大学生

I. 問題と目的

1. セクシュアリティの概念

性に関する概念としてセクシュアリティが挙げられる。現在、セクシュアリティという言葉はさまざまな解釈がなされている。たとえば、Kirkendall (1972)はセクシュアリティに関して次のように説明している。「過去においては性をいわゆるセックス、つまり身体的な部分やそれにかかわる行動の総称として考えてきたといえるが、今やこれはセクシュアリティ、すなわち人格と人格との触れ合いのすべてを包含するような幅の広い性の概念、という言葉で置き換えられるべきである。セクシュアリティでは人間の身体の一部としての性器や性行動のほか、他人との人間的なつながりや愛情・友情・融和感・思いやり・包含力など、およそ人間関係における社会的・心理的側面や、その背景にある成育環境などもすべて含むべきである」。

このほかにも、セクシュアリティは「性にかかわる多様な現象、欲望、イメージ、意識などをゆるやかに包括する概念（植村，2014）」、「性というものの多様性をさまざまな側面から捉えようとする発想であり、すべての人の、その人らしい性のあり方を考える時に用いることのできる概念（小宮，2016）」、「何を性行動の対象に選ぶかなどといった、性に関する行動の傾向の総称（葛西，2011）」等の解釈がなされている。以上をまとめると、セクシュアリティは単に身体的性別や性行動のみならず、性に関する個人のあり方や人間関係を幅広く包括する概念であるといえる。村瀬(2004)はセクシュアリティに関して「『生と性』とか『人間としてのあり方』という言い方もあるように、人間の性的欲求や性行動、人間関係における感情、行動のすべてを指す概念として用いられている。」と述べ、セクシュアリティを構成する柱として「Sex（性器の性別）、Gender identity（性別自認）、Gender role（性別役割）、Sexual orientation（性的指向）」の4点を挙げている。本研究では、村瀬(2004)が述べたように、セクシュアリティを大きく4つの柱で構成されるものとして考え、そのなかでも特にジェンダー・ア

アイデンティティに着目する。

2. ジェンダー・アイデンティティ

ジェンダー・アイデンティティには、2つの代表的な定義が挙げられる。1つは「自分が所属している性別について知っているという感覚のこと (Stoller, 1964)」, もう1つは「男性あるいは女性, あるいはそのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性, 一貫性, 持続性 (Money, 1965)」である。

伊藤(2000)はジェンダー・アイデンティティが重要な理由として, 性別が人間のアイデンティティの根幹にあることを挙げている。これまでジェンダー・アイデンティティに関するさまざまな研究がなされてきたが, 佐々木・尾崎(2007)はこれまでの研究の問題点として, ジェンダー・アイデンティティが性役割や性指向と混同して測定されていることや, Eriksonのアイデンティティ概念が反映されていないことを指摘している。佐々木・尾崎(2007)によると, これまでジェンダー・アイデンティティは社会的性役割を構成概念として測定されてきた (e.g., 東, 2002)。しかし, ステレオタイプな性役割への志向性が強いからといって自己の性別へのアイデンティティが強いということにはならないため, 自己の性別のありようについて抽象的に問うことが必要である。次に, 土肥(1996)のジェンダー・アイデンティティ尺度には「異性との親密性」すなわち性指向が構成概念に含まれているが, 同性愛者であっても自己の性別へのアイデンティティを持っているため, 性指向を構成概念に含めるべきではない。そして, ジェンダー・アイデンティティはある性別に対する統一性, 一貫性, 持続性という側面からとらえる必要がある。佐々木・尾崎(2007)は, ジェンダー・アイデンティティを「斉一性・連続性をもった主観的な自分の性別が, まわりからみられている社会的な自分の性別と一致するという感覚」と定義した。本研究では, ジェンダー・アイデンティティを性役割や性指向と区別し, 自己の性別のありようについて抽象的に測定できるという理由から, 佐々木・尾崎(2007)のジェンダー・アイデンティティの定義, ならびに尺度を用いることとする。

3. 性同一性障害, 性別違和に関する研究

ジェンダー・アイデンティティに関して苦悩を抱えている人として, 性同一性障害や性別違和のある人が挙げられる。性同一性障害や性別違和は精神疾患の概念である。東・針間(2001)によると, 世界保健機関の国際疾病分類10版(ICD-10)あるいはアメリカ精神医学会の「精神障害の診断統計マニュアル第4版 (DSM-IV)」のうちどちらか1つの診断基準に当てはまる場合, その人は「gender identity disorder (性同一性障害)」であると公式に認められることになる。DSM-5では, 「gender identity disorder (性同一性障害)」が「gender dysphoria (性別違和)」に変更され, その内容も①身体的性別が典型的な男性, 女性だけでなく, 性分化疾患も含み, ②心理的性別も典型的な男性, 女性以外のものも含むというより広範なものになった(針間, 2016)。

山内・庄野・加沢(2001)は, 性同一性障害にみられる基本的症状として, ①反対の性に対する強く, 持続的な同一感, ②自分の性別を表す身体的特徴を強く嫌悪あるいは忌避する, ③日常生活で, 反対の性別役割をとろうとすることを挙げている。そして, 性同一性障害に付随する問題として, 学校生活に対する不適応(制服, 運動, 学用品など)や, 職場に対する不適応(仕事, トイレ, 履歴書, 人間関係)等を挙げている。また, 性同一性障害当事者は不登校, 自殺念慮, 自殺未遂・自傷行為等を経験している割合が高いことも明らかとなっている(真鍋・花田・上石, 2000; 中塚・江見, 2004)。松本・中塚(2012)は, 性同一性障害当事者を含めたセクシュアル・マイノリティにおいて, 「一般的価値観と自らのありようの齟齬が, 当事者の自尊感情を傷つけ, メンタルヘルスを悪化させる。」と述べている。このように, セクシュアル・マイノリティにとって, 自らのセクシュアリティは自尊感情に大きな影響を及ぼしていることが考えられる。

4. ジェンダー・アイデンティティの多様性

針間(2016)によると、DSM-IVの性同一性障害では、男性ないし女性の性別しか想定していなかったため、そうでない者たちへの診断が困難であったが、DSM-5の性別違和では、男性ないし女性以外のさまざまなジェンダーのものも内包したものとなっている。佐々木(2016)によると、性の多様性、性はグラデーションなどと言われるようになってきたが、これは男女二分法であったセクシュアリティへの疑義が噴出し、多様性を前提にした性のありようへの舵取りが始まったためである。このように、近年では、性を多様なものとして捉える考え方が広まっている。

佐々木(2016)によると、身体的性別、ジェンダー・アイデンティティ、性役割、性的指向を強弱や濃淡によって理解することが個人のセクシュアリティの実際により迫ることができる。そして、これらの濃淡の組み合わせが、人によってそれぞれ異なることを以て、二人として同じセクシュアリティを持つ者は存在しないと述べている。これらのことから、セクシュアリティは多様であり、またジェンダー・アイデンティティも多様であるといえる。ジェンダー・アイデンティティが多様であるとするならば、性同一性障害や性別違和のある人ではなくても、ジェンダー・アイデンティティは自尊感情に影響を及ぼす要因となっているのではないかと考える。

5. 自尊感情

自尊感情(self-esteem)は、研究者によってさまざまな定義がなされている。Rosenberg(1965)は、自己に対する肯定的または否定的態度として自尊感情を捉えている。自尊感情は乳幼児期からの日常生活において成功経験や失敗経験を繰り返しながら、親、家族、友人、教師や成人といった周囲の人々からの承認・賞賛や否認・叱責などを介して形成されると考えられている。そして、自尊感情の高低は個人の意識や行動を規定する一因となりえる(東, 2000)。また、自己に対してある程度の肯定的な感情をもつことは、適応的に生きていくうえで重要である(岡田・小塩・茂垣・脇田・並川, 2015)。このように、自尊感情は自己概念のなかでもより重要であり、ジェンダー・アイデンティティとの関連についても検討がなされている(佐々木・尾崎, 2007)。

6. 本研究の目的

佐々木・尾崎(2007)は性同一性障害の当事者(男性から女性への移行者male to female(以下, MTF)、女性から男性への移行者female to male(以下, FTM))と非当事者の男性と女性を対象にジェンダー・アイデンティティと自尊心の相関を検討した。結果として、女性とFTMではジェンダー・アイデンティティの4因子(自己一貫的性同一性、他者一致的性同一性、展望的性同一性、社会現実的性同一性)すべてにおいて、MTFではジェンダー・アイデンティティの2因子(他者一致的性同一性、社会現実的性同一性)において自尊心との間に有意な相関がみられ、非当事者の男性では有意な相関がみられなかった。佐々木・尾崎(2007)は、男性においてジェンダー・アイデンティティと自尊心の間に有意な相関がみられなかった点について、男性役割パーソナリティと自尊心に関連はあっても(東, 2000; 石田, 1994)、男性という性別へのアイデンティティと自尊心には関連がないと考察している。一方、MTFでは他者一致的性同一性ならびに社会現実的性同一性と自尊感情との間に有意な相関がみられた点について、女性が男性として生きるよりも男性が女性として生きるときの社会的スティグマのほうが大きい(Heyes & Leonald, 1983; 東, 2005)ことが関連しているのではないかと考察している。

セクシュアリティが多様であり、またジェンダー・アイデンティティも多様であると考えれば、個人の性別を典型・非典型に分けることは困難であり、むしろ一人ひとり違って当然であるといえる。性同一性障害や性別違和のある人にとって、ジェンダー・アイデンティティが自尊感情と関連しているのであれば、そのほかの多様なジェンダー・アイデンティティをもつ人にとっても自尊感情との関連があるのではないかと考える。そこで本研

究では、ジェンダー・アイデンティティが自尊感情にどのような影響を及ぼしているかを検討する。

なお、ジェンダー・アイデンティティと自尊感情の関連について検討する際、発達の視点や性差の視点をふまえることが重要である。思春期には性的成熟や身体的成熟を迎え、生物学的には完態としての男・女になるが、男女とも性的成熟への戸惑いから性の受容度が急激に低下し、特に女性の落ち込みが著しい（伊藤，2000）。中塚・江見(2004)によると、思春期の性同一性障害当事者における自殺未遂や自傷行為はFTMに多く、二次的な精神科的合併症はMTFに多い。このように、思春期では自己の性に対する受容度が低下し、否定的な意識をもつことも少なくないが、思春期を経て発達が進むことで、性の受容度はしだいに高まると考えられる。山田・岡本(2007)によると、青年期は、それまで積み上げてきた「自分」の感覚や同一化を主体的に問い直し、一個の人間として自己を確立する時期であり、それは、自己の所属する場や関係する他者からの承認を得て、安定したものになる。このように、性の受容が高まり人間としての自己が確立する時期であるという理由から、本研究では大学生を対象に調査を実施する。

以上のことから本研究の目的をまとめると、第一の目的は、大学生のジェンダー・アイデンティティの高さによる自尊感情の差異を検討することである。第二の目的は、大学生の男女による違いを検討することである。第三の目的は、大学生のジェンダー・アイデンティティが自尊感情に影響を及ぼす規定因かどうかを検討することである。

Ⅱ. 方法

対象者 鹿児島県内の大学生218名（男性118名，女性100名）に質問紙調査を実施した。質問紙の回収率は100%であり，調査項目のすべてに記入漏れのなかった164名（男性87名，女性77名），平均年齢19.3歳（ $SD=1.14$ ）を有効回答とした。

質問紙 本研究で使用した尺度は、自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982），ジェンダー・アイデンティティ尺度（佐々木・尾崎，2007）であった。自尊感情尺度は1因子10項目からなり，あてはまる(5)，ややあてはまる(4)，どちらともいえない(3)，ややあてはまらない(2)，あてはまらない(1)のいずれかを選択する5件法で評定した。ジェンダー・アイデンティティ尺度は高次因子が「一致一貫的性同一性」「現実展望的性同一性」の2因子，低次因子が「自己一貫的性同一性」「他者一致的性同一性」「展望的性同一性」「社会現実的性同一性」の4因子からなり，全くあてはまらない(1)，ほとんどあてはまらない(2)，どちらかというにあてはまらない(3)，どちらともいえない(4)，どちらかというにあてはまる(5)，かなりあてはまる(6)，非常にあてはまる(7)のいずれかを選択する7件法で評定した。

手続き 2015年11月に，大学の講義のなかで調査を実施した。調査対象者に質問紙を配布し，落丁がないかを確認させ，調査の説明を行った。その際，個人が特定されることはないこと，答えたくない項目については答えなくてもよいことを説明した。

Ⅲ. 結果

1. 自尊感情尺度とジェンダー・アイデンティティ尺度の分析

(1) 自尊感情尺度

自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）の構成を検討するために，因子分析（最尤法，プロマックス回転解法，固有値1以上で因子を抽出，以下同じ）を行った。結果をTable 1に示す。因子分析の結果，1因子構造であることを確認した。これは山本・松井・山成(1982)とも一致するものである。因子に対して負荷量が低かった項

Table 1 自尊感情尺度の因子分析の結果

項目内容	
#10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。	.822
#9. 自分は全くだめな人間だと思うことがある。	.746
1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である。	.675
#5. 自分には、自慢できるところがあまりない。	.653
2. 色々な良い素質をもっている。	.648
4. 物事を人並みには、うまくやれる。	.616
6. 自分に対して肯定的である。	.567
#3. 敗北者だと思うことがよくある。	.559
7. だいたいにおいて、自分に満足している。	.453
#は逆転項目	

Table 2 ジェンダー・アイデンティティ尺度の因子分析の結果

項目内容	因子	
	1	2
因子1 一致一貫的性同一性		
#15. 人前での自分の性別は、本当の自分の性別ではないような気がする。	.930	-.092
#11. 今のままでは次第に自分の性別がわからなくなっていくような気がする。	.865	-.052
#14. 自分の性別に迷いを感じることもある。	.856	-.015
#9. 人に見られている自分の性別と本当の自分の性別は一致していないと感じる。	.781	-.062
#7. いつからか自分の性別がわからなくなってしまったような気がする。	.753	.004
#12. 女性(男性, 両性・どちらでもない性)としての自分は、人には理解されないだろう。	.731	.121
#4. 過去において、自分の性別をなくしてしまったような気がする。	.628	-.040
#1. 過去において、自分の性別に自信がもてなくなったことがある。	.603	-.014
#13. 女性(男性, 両性・どちらでもない性)として自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。	.532	.215
因子2 現実展望的性同一性		
8. 自分が女性(男性, 両性・どちらでもない性)としてすべきことが、はっきりしている。	-.049	.815
6. 現実の社会の中で、女性(男性, 両性・どちらでもない性)として自分らしい生活が送れる自信がある。	.000	.764
3. 現実の社会の中で、女性(男性, 両性・どちらでもない性)として自分らしい生き方ができると思う。	.055	.754
10. 現実の社会の中で、女性(男性, 両性・どちらでもない性)として自分の可能性を十分に実現できると思う。	.136	.722
5. 自分が女性(男性, 両性・どちらでもない性)としてどうなりたいたいかははっきりしている。	-.090	.636
2. 自分が女性(男性, 両性・どちらでもない性)として望んでいることがはっきりしている。	-.079	.503
因子間相関		.427
#は逆転項目		

目8「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を削除した結果、最終的な項目数は9となった。各項目の因子負荷量は、いずれも.45以上であった。Cronbackの α 係数は.86であり、高い一貫性が保障された。

(2) ジェンダー・アイデンティティ尺度

ジェンダー・アイデンティティ尺度の構成を検討するために、因子分析を行った。結果をTable 2に示す。因子分析の結果、2因子構造であることを確認した。佐々木・尾崎(2007)はジェンダー・アイデンティティ尺度の作成において、高次2因子と低次4因子を設定している。因子分析で確認した2因子構造は、佐々木・尾崎(2007)

の高次2因子とほぼ一致するものであった。一致しなかった点は、「女性（男性、両性・どちらでもない性）として自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う」の1項目が先行研究では高次2因子の「現実展望的性同一性」因子であったのに対し、本研究では「一致一貫的性同一性」因子に含まれた点である。本研究では佐々木・尾崎(2007)の高次2因子とほぼ一致していることから、第一因子を「一致一貫的性同一性」因子、第二因子を、「現実展望的性同一性」因子とした。佐々木・尾崎(2007)は、一致一貫的性同一性において「自己一貫的性同一性」と「他者一致的性同一性」の低次2因子を設定していた。また、現実展望的性同一性には「展望的性同一性」と「社会現実的性同一性」の低次2因子を設定していた。自己一貫的性同一性とは、「自己の性別が一貫しているという感覚」、他者一致的性同一性とは、「自己の性別が他者の思う性別と一致しているという感覚」、展望的性同一性とは、「自己の性別での展望性が認識できているという感覚」、社会現実的性同一性とは、「自己の性別が社会とのつながりを持っているという感覚」である。本研究では、佐々木・尾崎(2007)の低次4因子の説明を援用し、一致一貫的性同一性を「自己の性別が他者の思う性別と一致していて、かつ一貫しているという感覚」、現実展望的性同一性を「自己の性別が社会とのつながりを持っていて、かつ展望性が認識できているという感覚」とする。各項目の因子負荷量は、いずれも.50以上であった。Cronbackの α 係数は一致一貫的性同一性が.90、現実展望的性同一性が.84であり、高い一貫性が保障された。

2. 一致一貫的性同一性の違いによる自尊感情の差異

一致一貫的性同一性の違いによる自尊感情の平均得点の差異を検証するために、独立変数を一致一貫的性同一性（高群、中群、低群）、従属変数を自尊感情の尺度得点とする対応のない1要因の分散分析を行った。なお、一致一貫的性同一性の群分けには因子の得点を項目数で割った平均値(M)とその標準偏差(SD)を用い、「 $M+0.5SD \leq$ 個人の平均値」を高群（69名）、「 $M+0.5SD >$ 個人の平均値 $\geq M-0.5SD$ 」を中群（71名）、「 $M-0.5SD >$ 個人の平均値」を低群（24名）とした。Table 3に各変数の平均値と標準偏差を示す。

その結果、主効果 ($F(2,161) = 14.36, p < .001$) が有意であった。有意水準5%のTukeyのHSDによる多重比較を行った結果、一致一貫的性同一性の高・中・低群の順で有意に自尊感情の尺度得点が高かった。

以上の結果をまとめると、一致一貫的性同一性が高い人ほど、自尊感情も高いといえる。

3. 現実展望的性同一性の違いによる自尊感情の差異

現実展望的性同一性の違いによる自尊感情の平均得点の差異を検証するために、独立変数を現実展望的性同一性（高群、中群、低群）、従属変数を自尊感情の尺度得点とする対応のない1要因の分散分析を行った。なお、現実展望的性同一性の群分けには因子の得点を項目数で割った平均値(M)とその標準偏差(SD)を用い、「 $M+0.5SD \leq$ 個人の平均値」を高群（56名）、「 $M+0.5SD >$ 個人の平均値 $\geq M-0.5SD$ 」を中群（62名）、「 $M-0.5SD >$ 個人の平均値」を低群（46名）とした。

その結果、主効果 ($F(2,161) = 18.03, p < .001$) が有意であった。有意水準5%のTukeyのHSDによる多重比較を行った結果、現実展望的性同一性の高群は中群・低群よりも有意に自尊感情の尺度得点が高かった。

以上の結果をまとめると、現実展望的性同一性が高い人ほど、自尊感情も高いといえる。

Table 3 各変数の平均値と標準偏差

		全体	男性	女性
自尊感情		27.26(7.25)	27.70(7.60)	26.77(6.84)
ジェンダー・アイデンティティ	一致一貫的性同一性	57.92(8.86)	57.36(9.06)	58.56(8.65)
	現実展望的性同一性	30.46(7.47)	31.39(8.15)	29.40(6.51)

数値は平均値、()は標準偏差

4. 男女の違いによる自尊感情の差異

性別の違いによって自尊感情の平均得点に差があるかどうかを検証するために、対応のないt検定を行った。その結果、平均値間に有意な差はみられなかった ($t(162)=0.82, n.s.$)。

5. 自尊感情におけるジェンダー・アイデンティティの規定因

自尊感情の尺度得点が、ジェンダー・アイデンティティの2因子（一致一貫的性同一性、現実展望的性同一性）の尺度得点からどの程度予測できるかを検討するために、自尊感情を目的変数、ジェンダー・アイデンティティ

Table 4 変数間の相関係数

	全体	男性	女性
自尊感情—一致一貫的性同一性	.369 ***	.284 **	.494 ***
自尊感情—現実展望的性同一性	.455 ***	.601 ***	.217 *
一致一貫的性同一性—現実展望的性同一性	.377 ***	.410 ***	.365 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

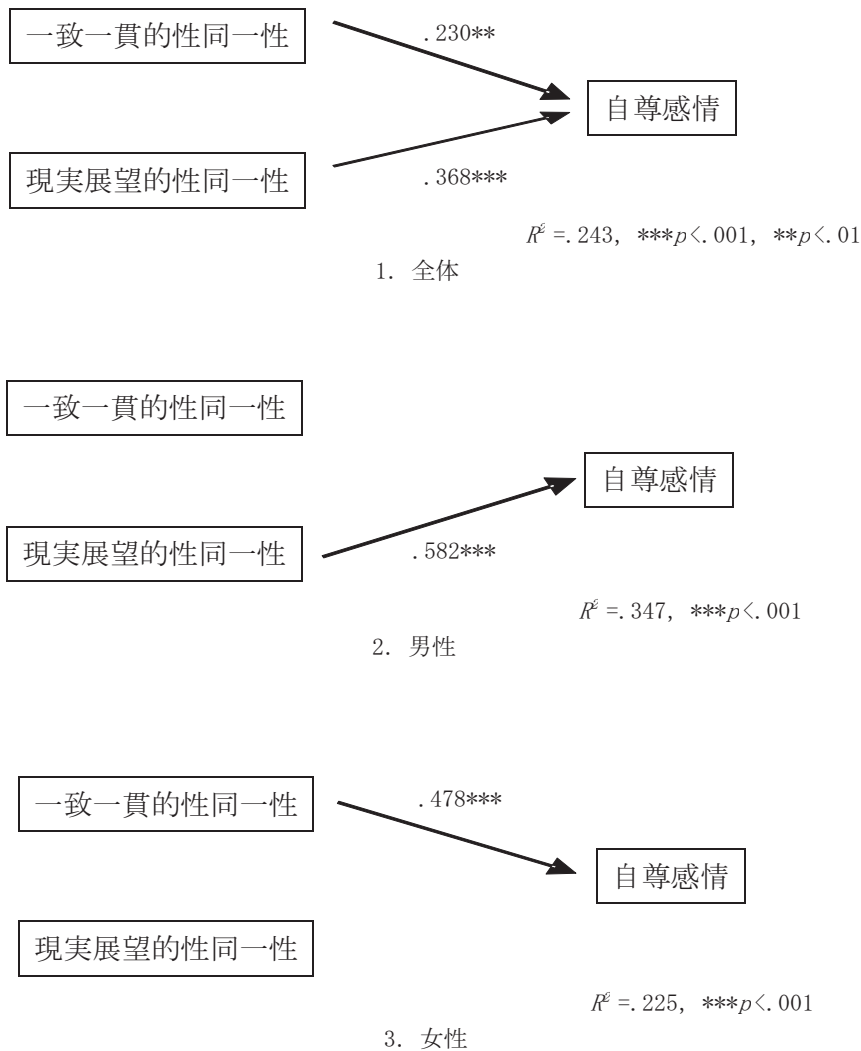


Figure 1-3 ジェンダー・アイデンティティの2因子を説明変数、自尊感情を目的変数とする重回帰分析結果

の2因子を説明変数とする重回帰分析を行った（強制投入法）。変数間の相関係数はTable 4に示す。その結果、全体では一致一貫的性同一性の尺度得点および現実展望的性同一性の尺度得点が正の方向へ自尊感情の尺度得点を予測することが示された（順に $\beta = .230, p < .01$; $\beta = .368, p < .001$ ）（Figure 1）。そして、一致一貫的性同一性よりも現実展望的性同一性の影響が大きいことが示された。性別による違いを検討するために、男女別に重回帰分析（強制投入法）を行った。男性では、現実展望的性同一性の尺度得点が正の方向へ自尊感情の尺度得点を予測することが示された（ $\beta = .582, p < .001$ ）。一致一貫的性同一性については有意ではなかった（ $\beta = .046, n.s.$ ）（Figure 2）。女性では一致一貫的性同一性の尺度得点が正の方向へ自尊感情の尺度得点を予測することが示された（ $\beta = .478, p < .001$ ）。現実展望的性同一性については有意ではなかった（ $\beta = .043, n.s.$ ）（Figure 3）。

以上の結果をまとめると、全体においては一致一貫的性同一性と現実展望的性同一性が自尊感情に影響を及ぼし、その影響は現実展望的性同一性が一致一貫的性同一性よりも大きかった。男女別にみると、男性では現実展望的性同一性のみ、女性では一致一貫的性同一性のみが自尊感情に影響を及ぼすことがわかった。

IV. 考 察

1. 一致一貫的性同一性ならびに現実展望的性同一性の高さによる自尊感情の差

一致一貫的性同一性の高さによる自尊感情の差異を検討した結果、一致一貫的性同一性では高・中・低群の順で有意に自尊感情が高かった。一方、現実展望的性同一性では高群が中・低群よりも有意に自尊感情が高かった。以上をまとめると、一致一貫的性同一性ならびに現実展望的性同一性が高い人ほど、自尊感情も高いといえる。この結果は、ジェンダー・アイデンティティに苦悩を抱える性同一性障害や性別違和のある人に自殺未遂や自傷行為等の問題行動が多い（真鍋・花田・上石, 2000 ; 中塚・江見, 2004）という結果と一致するものだと考える。

本研究でジェンダー・アイデンティティの2因子（一致一貫的性同一性、現実展望的性同一性）が高い人ほど自尊感情も高いことが示されたことは、広く青年期の人にとってジェンダー・アイデンティティが自尊感情に影響を及ぼす要因であることを示唆するものだと考える。

2. 自尊感情の性差

自尊感情の性差に関して、自尊感情に性差があるとする研究（e.g., 山本, 1982）もあれば、性差はないとする研究もあり（遠藤, 1992）、必ずしもその結果は一貫していない。岡田・小塩・茂垣・脇田・並川(2015)は、日本における自尊感情の性差を明らかにすることを目的として、自尊感情の性差を報告する50研究に対してメタ分析を行った。その結果は女性よりもわずかに男性の方が自尊感情が高かった。そして、日本人においても自尊感情の性差は確かに存在するものの、海外と同様にその程度は小さいと述べている。本研究において自尊感情の性差を検討した結果、有意な性差は認められなかった。今後は対象者の発達段階等の特性を踏まえたうえで、自尊感情の性差を検討していくことが必要だと考える。

3. 自尊感情におけるジェンダー・アイデンティティの規定因

自尊感情におけるジェンダー・アイデンティティの規定因を検討した結果、全体では一致一貫的性同一性と現実展望的性同一性が自尊感情の規定因となっていることが示された。そして、現実展望的性同一性のほうが一致一貫的性同一性よりも自尊感情への影響が大きいことが示された。一致一貫的性同一性とは「自己の性別が他者の思う性別と一致していて、かつ一貫しているという感覚」のことであり、現実展望的性同一性とは「自己の性別が社会とのつながりを持っていて、かつ展望性が認識できているという感覚」のことである。現実展望的性同一性の影響が一致一貫的性同一性よりも大きかった点に関しては、青年期後期としての大学生の特性が関係して

いると考える。大学生は職業選択をはじめ、将来についてより深く考える時期である。将来について考える際、自分の性別が社会とつながりを持てるか、自分の性別で展望性が認識できるかということはより重要だと考える。なぜなら、自分の性別と社会とのつながりを持たず、展望性が認識できなければ、将来への希望や期待を損なってしまう可能性があるからである。よって、大学生の自尊感情においては現実展望的性同一性の影響がより大きいと考える。

男女別の結果では、男性において現実展望的性同一性のみ、女性において一致一貫的性同一性のみ自尊感情の規定因となっていることが示された。佐々木・尾崎(2007)は、ジェンダー・アイデンティティと自尊心において女性では相関があり、男性では相関がなかったことを示している。本研究において女性の自尊感情に一致一貫的性同一性が影響を及ぼすことが示されたことは、女性のジェンダー・アイデンティティと自尊心に関連があるという佐々木・尾崎(2007)の結果を支持するものである。しかし、本研究では男性の自尊感情に現実展望的性同一性が影響を及ぼすことが示され、男性のジェンダー・アイデンティティと自尊心には関連がないという佐々木・尾崎(2007)の主張とは異なる結果が示された。

男性と女性で自尊感情に影響を及ぼす因子が異なっていた理由としては、男女の特性の違いが考えられる。たとえば、女性は周囲との関係に敏感で、周囲から求められる期待に応える望ましい存在であらねばならぬという意識をもって、男性は「不安を表してはいけない」「自分の意見を確信をもって表明しなければならない」「競争に勝たなくてはならない。勝ち続けなければならない。」という意識をもってされるとされる(伊藤, 2000)。女性は他者との人間関係を重視する傾向があることから女性として他者と一致することや女性としての性別が一貫していることを重視するのではないかと考える。一方、男性は強いことや勝つことを重視する傾向があることから、男性としての展望性が認識できることや、男性として社会とつながりを持てることを重視するのではないかと考える。

4. 研究のまとめと今後の課題

本研究では、セクシュアリティのなかでもジェンダー・アイデンティティを中心に分析を行った。本研究の結果をまとめると次の通りである。第一に、一致一貫的性同一性ならびに現実展望的性同一性の高さによる自尊感情の差を検討した結果、一致一貫的性同一性の高群が中群・低群に比べて有意に自尊感情が高く、中群が低群に比べて有意に自尊感情が高かった。また、現実展望的性同一性の高群は中群・低群に比べて有意に自尊感情が高かった。第二に、性別の違いによる自尊感情の平均値の差を検討した結果、男女間で有意な差はみられなかった。第三に、自尊感情におけるジェンダー・アイデンティティの規定因を検討した結果、全体では一致一貫的性同一性と現実展望的性同一性が自尊感情の規定因となっていることが示され、現実展望的性同一性のほうが一致一貫的性同一性よりも影響が大きいことが示された。男女別では、男性において現実展望的性同一性のみ、女性において一致一貫的性同一性のみが自尊感情の規定因となっていることが示された。

本研究ではジェンダー・アイデンティティを中心に分析を行ったが、セクシュアリティと自尊感情の関連を明らかにするためには、セクシュアリティのほかの要素(性的役割、性的指向等)との自尊感情の関連を検討する必要もある。なかでも性的指向に関しては自尊感情に大きな影響を及ぼしていることが考えられる。杉山(2006)は性的指向が少数派である同性愛の生徒が学校の中で直面する困難として、特に①自己受容・アイデンティティ獲得の困難、②自己開示・人間関係づくりの困難、③自己イメージ形成・ロールモデル獲得の困難を挙げている。性的指向が少数派である同性愛者や両性愛者などの自尊感情が多数派である異性愛者とどのように異なるのかといったことを検討することが必要だと考える。

V. 引用文献

- 東 清和(2000). 男性性・女性性と社会的自尊感情との関連性 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 10, 1-11.
- 東 清和(2002). 性同一性カテゴリーと自尊感情との関連性—伝統一致モデルの検証— 早稲田大学教育学部学術研究(教育心理学編), 50, 1-12.
- 土肥伊都子(1996). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究, 44, 187-194.
- 遠藤由美(1992). 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, 40, 157-163.
- 針間克己(2016). 「性同一性障害」から「性別違和」へ—DSM-5における診断名変更の背景— 精神療法, 42(1), 15-18.
- Heyes, S. C., & Leonard, S. R. (1983). Sex-related motor behavior: Effects on social impressions and social cooperation. *Archives of Sexual Behavior*, 12, 415-436.
- 東 優子・針間克己(2001). 性同一性障害の治療とケアに関する基準(SOC) 臨床精神医学, 30, 887-902.
- 東 優子(2005). 当事者に対する社会的支援—誰の, 何を支援していくのか— モダンフィジシャン, 25, 435-438.
- 石田英子(1994). ジェンダー・スキーマの認知相関指標における妥当性の検証 心理学研究, 64, 417-425.
- 伊藤裕子(編)(2000). ジェンダーの発達心理学, ミネルヴァ書房
- 葛西真記子(2011). 同性愛・両性愛肯定的カウンセリング自己効力感尺度日本語版(LGB-CSIJ)作成の試み 鳴門教育大学研究紀要, 26, 76-87.
- Kirkendall, L. A. ・波多野義郎(訳)(1972). 現代社会における性の役割—われわれにとって性とは何か, 現代文明社会における性の本質を追求する— 現代性教育研究, 1, 123-137.
- 小宮千穂(2016). 松浦理恵子『親指Pの修業時代』論—その多様なセクシュアリティを読み解く— 日本文学, 112, 91-104.
- 真鍋幸嗣・花田雅憲・上石 弘(2000). 性同一性障害患者の性差 近畿大学医学雑誌, 25(2), 165-169.
- 松本洋輔・中塚幹也(2012). 2)性同一性障害とは—セクシャルマイノリティーの基礎知識— 日本産科婦人科学会雑誌, 64(9), “N-220”-“N-224”.
- Money, J. (1965). *Sex research; New developments*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 村瀬幸浩(2004). 〈最新版〉SEXOLOGY NOTE セクソロジー・ノート 性……もっとやさしく もっとたしかに……, 十月舎
- 中塚幹也・江見弥生(2004). 思春期の性同一性障害症例の社会的, 精神的, 身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討 母性衛生, 45(2), 278-284.
- 岡田 涼・小塩真司・茂垣まどか・脇田貴文・並川 努(2015). 日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析 パーソナリティ研究, 24(1), 49-60.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 佐々木掌子(2016). セクシュアル・マイノリティに関する諸概念 精神療法, 42(1), 9-14.
- 佐々木掌子・尾崎幸謙(2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 パーソナリティ研究, 15(3), 251-265.
- Stoller, R. J. (1964). A contribution to the study of gender identity. *The International of Psycho-analysis*, 45, 220-226.
- 杉山貴士(2006). 性的違和を抱える高校生の自己形成過程—学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産

- の視点から— 技術マネジメント研究, 5, 67-79.
- 植村恒一郎(2014). 「ジェンダー化されたセクシュアリティ」について—あるいは「セクシュアリティのジェンダー化」とは— 群馬県立女子大学紀要, 35, 143-153.
- 上野淳子(2008). 心理学における性的マイノリティ研究—教育への視座— 四天王寺大学紀要, 46, 73-83.
- 山田みき・岡本祐子(2007). 「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティに関する研究の動向と展望 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 人間科学関連領域, 56, 199-206.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30(1), 64-68.
- 山内俊雄・庄野伸幸・加沢鉄士(2001). 性同一性障害の心理的側面 臨床精神医学, 30, 751-756.

Ⅵ. 謝 辞

本研究は、平成27年度に鹿児島国際大学に提出した卒業論文の一部に加筆し、考察を深めたものである。ご指導くださった鹿児島国際大学の佐藤直明先生、原口恵先生、京都教育大学の田爪宏二先生、そして調査にご協力くださった大学生のみなさまに心からお礼申し上げます。

